

# 実践倫理

野木將典

## 目次

- 一、國士館の再建
- 二、歴史の証左
- 三、固定しない評価
- 四、実践の評左・小野田寛郎氏に見る倫理
- 五、活動経過資料抜萃
- 六、干渉と無視に揺れる心・子どもの事例
- 七、根本は気育―欠落している環境
- 八、実践活動への理解と認識

身はたとひ武蔵の野辺に

朽ちぬとも

留めおかまし大和魂

維新の大業に身を挺した志士・吉田松陰辞世の句

## 一 國土館の再建

手許に「國土館大学再建趣意書」がある。昭和二十七年被占領国の桎梏から解かれようとする民族の忍苦の歲月の中から、生存する歴代宰相と政官財界を代表する二百余人もの人物群が、創始者柴田徳次郎師を擁立して國土館を再興した真情が簡明で直截な趣意書の行間に滲む。

野球のストライクを良しと云い、ボールを駄目と云う敵性語排除の表相現象を、被占領下における占領軍司令官への民衆の追従行動と対比して民族性を貶める報道の偏重を峻拒して、国体の根幹が堅持されて来たことを「國土館再建趣意書」は痛烈に訴えるものであったろう。

## 國士館再建趣意書

國士館の再建に當り同憂の各位に  
懇へたい

國士館の創建以來茲に三十有五年  
敗戦後の外國占領下當局の勸告に  
より一時「至徳學園」と改稱した  
が建學の趣旨は渝るところなく占  
領の終了と共に再び國士館の舊稱に  
復ることになつたけれど國士とは武

武も屈する能はず貧賤も移す能は  
ざる本當の人間であつてこれを措い  
て教學育人の目標はあり得ないから  
であらう

然らば本當の人間とは何であるか今  
の世においては何等特別の徳操では  
ない常識である平衡を得た人格  
である狂人が走つても共に駆け出さ  
ない平常心の持主である事は極めて  
平凡の様であるが如何なる武

の下にも如何なる誘惑の前にも能く  
平常心を失はず判断を誤らぬこと  
は容易の如くにして決して容易でない  
而してそれを能くすると云とは殆ど  
繋つて常識を具足するか否かにあ  
るのである

イギリスに空前の総罷業が行はれ  
やしてそれが腰解けた終つた時ポルト  
ウイン首相は「これは英國民の常識の  
勝利だ」と叫んだ云にそれは政府権力

の勝利である國民常識の勝利だつ  
たのである例をイギリスに求めるまでも  
ない吾來國を危くするものは平  
衡の失はれたことである國の根幹が  
常識によつて固められるならば動亂  
の中に至つても國は危くない國土館  
の養成せんとするものはこの常識  
であり如何なる誘惑の前にも平常  
心を喪はない人格である

今日の教育について種々の批判を聞

いかに最も大なる岐嶺はその  
教育の方針が國の常識と懸け離

れて居ることである學問の自由を叫  
ぶうちに教育の目的を忘れたところ  
にある役に立つ人を作る代りに役に  
立たない人を作りつゝあることをある

國士館は深く日本の將來を考へ  
國の常識に基いて役に立つ人間を  
作りたいそれが念願である

國士館は創業三十五年大方諸賢

の保護と比喩によつて自ら特異の  
傳統を培ひ來つた武道教育は

その一であり國士館の名は武道界に  
おいて一の存在になつて居るこの武

道教育は國士館の再出發と共にま  
すますその特長を生かして行きたい

けれど文武は鳥の兩翼車の兩輪  
欠かぬ武の想像をれ得ざる如く

武なき文をもつては徳性の完成を  
期し得ないからである

若しそれ學風の揚るべきとは

學校當事者の發憤精進と共に

同愛諸賢の垂教に俟つところ甚だ  
多い切に大方の御支援を仰ぐ

石橋正一郎 小原直

佐宮啓一郎 岡 伊能

出光修三 杉本幹一郎

香川善一郎 太田茂孝

緒方竹虎 工藤良太郎

緒方竹虎 工藤良太郎

藤原銀次郎 全盛

石堂朝平

清原少輝

武田源光

松本健三郎

野田俊作

中野金太郎

曲百省一

麻生太賀吉

鳩山一郎

下中淳三郎

植村甲子丸

山川良一

太田清光

寺尾達

田代茂樹

若谷武雄

石川清

中村清一 和仁路之

里村藤八 兼田清

高木清三

松森久盛

金子修吉 田中郷之

本吉七郎 田中外次

大高し龍顯 坪 子 翁 息 三

中 満 一 郎

新市市助

西田隆安

上坂司

捐 務 渡

高木清三

高木清三

高田五郎

食田主税 澁澤敬三

高橋正吉 田中郷二

阿部賢一 末松鳳平

遠山元一 兼多中平

小坂順造 鋸島楚之

二田力也 渡邊義介

横尾龍 兼友市

天不敬朗 小坂重三郎

お井七郎 小坂重三郎

赤田 久

福永年久 安川第五郎

小池厚之丞 永野重雄

坂田良三

堀原治

康島守之助  
重田重雄

佐田健輔

山地上佐太郎

石井光太郎  
長松 宗一

七尾彰彌

永江真那

松尾忠之  
佐分利 武

木曾重義 海原清平

諸井世一 佐野隆一

木村篤太郎

草壁 義一

青木一男

山本春介

西村修造

糸島幸雄

高杉 吾一

川小波一

早川 慎一

井村 慈花

磯谷 三郎

龜山 正

今五 廣記

山下 大實

玉井 香介

横山 原純

三浦 貞雄

山本 寅次郎



栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

栗田 中

大島幸一

花岡南造

田村文一

横井彦太郎

佐木義彦

古田幸次

相島敏夫

坂内義雄

森野治

大建英雄

谷山乙

高木陸郎

森永石中

伊庭和吉郎

関桂三

大西清忠

雲橋 母

大島知昇

堀新

加藤永根

弘世 現

所定武元

十條製紙株式会社

山田三太郎

井上五郎

岩倉五

武智徳

藤波 收

石坂泰三

内山 隆二

林源一

南澤義

石田武雄

沖島 錦三

根津嘉一郎

和田恒翁

金井 恆直  
飯田 直孝

岡野 幸太

永田 昌

小林 少一

村上 利吉  
佐藤 三平

栗木幹

房山石

尖脚

石毛都治

透藤构化

松田云雄

波迄情氣

山根春高

而京大造

鈴木榮治

稱曰

官下依

伊藤我雄

岩津善正

牛尾榮次

渡辺靖彦

小宮丹治

山根春高

雨宮謙次

平山春云

武蔵路

杉通

方坂橋次市

佐藤長一

迫部二

西園寺實

玉井

牛尾榮次

山崎新

土田内

五公昇

堀田公太

陽

物

奥村

高田

長岡

新井

工部

平田

平陽敏隆

賀屋興直

鈴木九平

中野淳吉

宇佐美 詢

山住克己

加茂三一

恒光早良

山崎 七子

雲川竹馬

福田計夫

佐藤栄作

三岡 忠市

三宅 公武

上野 十次

星 亨

伊與田光男

三上 公

茂田 内平

林 孝

三岡 忠市

紫雲 乃

山口 武夫

中野 淳吉

半井 清

高山 達

安井 謙

佐藤 曉徳

佐藤 孝

野村 三治

中野 淳吉

板本隆一郎

秦 永造

二宮 善基

大野 信時

椎名 悦郎

茂田 忠市

吉田 亮造

岸 信介

办藤一市  
藤山勝友

原吉平  
松浦登義

川又左三

岡義長

伊藤重雄

濱口吉三

宮森和史  
海内美雄

大波信史

森押一

柴田周吉

山本久繁

## 二 歴史の証左

民族の歴史は、報道の独断と民衆煽動によって変節し歪曲されるほど軟弱輕薄ではなく、一時的に攪亂されたかに見えた事物も、わづか数十年の単位で真実の証明が施されている。即ち、実践倫理の積重ねが歴史の証左である。

幕末の若者たちが、志士に変容し、国難に身命を挺する覚悟を修養した背景は、地を這い波濤をくぐりながら伝聞の実証に師を求め共鳴者を探し自らを勉勵する繰り返しを撓むことなく続けて、人倫を知り至道を確信した一途な生き方と、彼等を訓し、導き、疵護した人物に恵まれた事実である。

天与の俊英、吉田松蔭の思想と実践を祀る杜の傍らに、大正六年大民社運動の展開裡に教育・実践教育をめざす「国士館義塾」が呱呱の声をあげ、星霜の間に南米アマゾンを筆頭に地球上の随所に、本来極めて普通である「誠意・勤勞・見識・気魄」を修学した国士館人が健在活躍している。

師。柴田徳次郎先生直々に実践倫理の薰陶をうける千載一遇を得て、大学に留まり師道の驥尾きびに付いて、巷間を教場とし、参集する青少年を、己れの明鏡として二十余年、足るを覚えず踏みしめてきた足跡から証左の報告をまとめみる。

## 三 固定しない評価

地方自治体と協調して、地域の子供達延べ四、〇〇〇名ほどを柔道を通じて育成してきた。学生時代から今日まで二十三年くる日もくる日も、大学と道場と自宅を一定時間ごとに周回していると、反覆作用で行動が固定すると思い

込み易いが、事実は全く逆である。何処でどんな事態が発生しても対応に抵抗感がなくなる。時間からの追求と圧迫から解放されて、四時自在の自然体となる。対面する青少年たちも、その瞬間ごとに異なった能力を見せつけて、一面だけの評価をさせてはくれない。

所謂概念の世界である。固定観念に辿りつく、否、終生百態に揺れつづける方則のない人間性には、辿りつくべき固定観念など存在しないのであって、唯々行動の基点と反覆作業の蓄積が一見安定した固定状態に写るだけかも知れない。

### 検証Ⅰ

われわれが神と自然から受けた最高のものは生命であり、休息も静止も知らない弟子（モナミ）の自転回転運動である。この生命をはぐくみ育てる衝動は、各人に生まれついて破壊しがたい。しかし生命の特性は自他にとって常に秘密である。

（ゲーテ「格言と反省から」）

優れて伸長性の高い期待に満ちた少年時代を持った青年が、数年を経た再会の場に、実に凡庸で克己心の薄い無気力な表情で現われたとき、一別以来歩いてきた彼の日常の変化過程が実によく想像できた。彼の周囲に彼と共に、自らを鍛え彼をも訓育する何人の存在もなかった。即ち実践倫理者の不在である。

## 検証Ⅱ

生まれのよい健康な子どもは多くのものを具えています。自然はすべての人に、一生の間必要とするものを全部与えました。これを発展させるのがわれ／＼の義務です。往往にしてそれはひとりで一層よく発展します。しかし、ただ一つだれも持って生まれて来ないものがあります。しかも、それこそ人間があらゆる方面にかけて人間であるためには、最も大切なものです。それを見つけることができれば、言うてごらんさい」。ヴィルヘルムは暫く考えてから、頭をふった。

彼らは適当な間をおいてから叫んだ。「畏敬です！」ヴィルヘルムはあつげにとられた。——「畏敬です！」と繰返し言われた。「これはすべての人に欠けています。多分あなた御自身にも。」

(ゲート「ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代」第二巻第一章から)

## 四 実践の証左・小野田寛郎氏に見る倫理

昭和四十九年フィリピン国ルバング島から、三十年間の戦闘状態を終えて生還した小野田寛郎元陸軍少尉は、極めて稀な固定観念を持たない生き方の出来る人だと考えた。

六年経って初めて個人的に小野田氏と面接したとき、生還された時のままの認識を更に強くした。素早い身のこなし、直截な表現、それでいて極めつきの慎重さがうかがえる。ムダのない行動形式が自ずと身につ



いている、ある種の習性とでも呼ぶべき小野田氏の姿に、現実の日本人のそれを重ね合わせる舞台を想定してみた。

### 検証Ⅲ

南の島でも雨季に入ると、容赦なく衣服に浸みる水分が、体温を奪うために寒気に震へながら必死に雨上がりを待ったものだった。

避けることが出来ない限られた環境の中で、自己を保つことは一見難かしそうに思えるが、現実には遭遇すると、訓練の度合によって存外大丈夫である。戦闘という極限の状況に置かれなくとも、其処比処に訓練の機会がある。

この夏、東京都江戸川区と山梨県忍野村のご協力を戴いて行った第一回自然塾キャンプの際、山中で炊飯を行い各自どんぶり一杯の豚汁を渡して、「お代りがない」こと、他に副食の用意がないことを説明したときの、子どもたちの緊張した慎重な表情を忘れることができない。自分のテントまで凹凸し屈折した杣道に歩一步を進める子どもした後姿に、正直で素直な真剣さが漂っていた。無表情で反射的にテレビ、スイッチに手を伸ばす受動的な日常性から、わづか数日間解放しただけでも、子どもたちが取戻す人間本来の体験的感動と自信は大きい。

撓まず屈せず、生きてゆくごく当り前の必要な体を心を、すべての子どもたちに育ててゆく努力を、大方皆様のご支援で続けていきたいと思う。

小野田 寛郎

（「小野田寛郎と共に歩む会」会誌より）

## 検証Ⅳ

偶々南米の荒野に余生を定めた小野田氏の共鳴もあって、昭和五十八年十一月に日本に招いて、自分の実践道場が集まる子供達を見てもらったところ、子供達の行動が小野田氏の感興を呼んで、定期的に来日して子供達の育成事業に参加して下さることになりました。

すべての国民が感動して小野田寛郎さんのフィリピン・ルバンゲ島からの帰還を歓迎したのは、昭和四十九年でした。目的をもって耐へ抜かれた三十年と、帰還後の国民英雄視されることへの懸念とに、潔よく訣別されてブラジルでの牧畜事業に専念され乍ら、この約十年間、小野田さんは折角帰った祖国日本に生命を捧げる報恩の途を毎日思い続けてくれました。

昭和五十七年に、小野田さんの著書「わがブラジル人生」の出版打合せなどで一時帰国されたとき、初めてお目にかかった私に、小野田さんは、実に澄んだ眼差しで「日本の若者たちは、どうして電車の中でまでマンガ本を読みふけったり、道路で人におっつかっても会釈ひとつしないで無表情でやり過ぐのですか」と云われて、返事に窮したことがありました。

実践活動として約二十年続けてきた柔道の道場に小野田さんをお招きして、小学生から高校生まで約二百人程の練習生にご講話をお願いしたところ、聴き入る子どもたちが素直にうなづくのを見て感動いたしました。

「健康であること」の大切さ、万人誰でも当然のことで言葉にするまでもないこと、とタカをくくっていたものが、体験の上に立った小野田さんの口から同じ言葉が出ると、本当に「健康を維持し守る」ことの重要さと感

動が実感として子どもたちの心に響いていきます。

私は、小野田さんの教育への熱情を奇貨として、東京都江戸川区の中里区長を中心に、昭和五十九年七月「小野田寛郎と共に歩む会」を結成し、第一回自然塾を実験的に山梨県忍野村で実施いたしました。

偶々、時勢が「教育を考える」必要に迫られている厳しい環境にあることから、自然塾に対する各界各分野の関心が大きく、マスコミの紹介、報道の反響をうけて全国的に自然塾開催の要望が昂っておることも事実でございます。

小野田寛郎さんの貴重なご体験と崇高な理念を現実的な社会活動に展開して、「すべての子どもたちが健康で、心くばりのできる状態に自らをおくことを目的として生きる」ための環境づくりが自然塾の使命であります。

自然塾塾頭 野木 將 典

〔小野田寛郎と共に歩む会〕発足会誌より〕

長年、施設提供に協力をうけ、青少年育成に理解の深い東京都江戸川区長にお願ひして「小野田寛郎と共に歩む会」を結成し、北海道から九州まで、小野田氏と共に自然塾行脚を続ける一方で山や海に子どもたちの自然心調和の実践活動を始めたのは昭和五十九年七月からだった。

## 五 活動經過資料拔萃

### 「小野田寛郎と共に歩む会」設立趣意書

是非はともかくとして、国家挙げの大戦に敗北して以来、三十八年の歲月の流れの中で、「敗戦」の实体験世代から無体験世代への急速な交代が進み、「日本人としての自覚」の認識に大きなヒズミが生れていきます。

小野田寛郎さんは、大戦の最中、国家と民族のために信念を貫き通して、遂に孤守三十年、自らの使命を全うし、世界中の人々の「見事な日本人精神」の具現者としての感嘆と称讃の喝采を浴びて帰還されました。

そして十年、小野田さんは、世情に混ざらず名声を避け、衆人環視の偶像を拒み、ひたすらブラジルの大地に牧畜を営まれ、たが、心のうちは遙か祖国日本の行方には無関心ではいられません。た、その小野田さんの心は、常に自分の青少年時代と今日に生きる日本の青少年の姿が重なり、

「二十世紀の日本が、今の少年達によって創り上げられ、危機感と教育の根本において期待感へ移し、変える必要性和痛感しておられます。

温和で優しい小野田さんの表情の内側で、全世界の人々に実証された強靱な意志力と冷静な洞察力を育て完成された「不撓不屈の魂」を、これから日本の少年達のために役立てたいと発念されました。

前大戦で前途大望を果し得ず靖国神社に祀られた英霊の遺志を承け、また各界有識の皆様のご指導、ご支援のもとに「心くばりの出来、心身の健やかな青少年の育成に全力を傾注したい」と熱情をあらわされた小野田寛郎さんに感動し、ここに「小野田寛郎と共に歩む会」と結成いたしました。

広く皆様方のご賛同をお願いいたします。

# Voice

## 特集 大攻勢! アメリカの底力

日下公人|石川 好|唐津 一|日高義樹

日本人と零戦|岡崎久彦vs柳田邦男|

日本をアジアの情報発信基地に!|磯村尚徳|

# 11

1984. 11月号 ボイス 転載

### 「自然塾」教育覚え書

祖国日本へ恩返しをしたい。自然塾に賭ける志とは

小野田 寛 郎

#### 証人なき戦い

あれからもう一〇年である。

昭和四十九年、フィリピン共和国のルバング島から帰還した私が、ブラジルでの牧場経営を決意し、入植したのは翌年の昭和五十年のことであった。

その牧場経営は、現地の人びとの親切なアドバイスを受けながら、ようやくいまマット・グロッセ州のパルゼア・アレグレ

——サンパウロ市から西北西へ約一二〇〇キロの地点——に一二八ヘクタール（約三六〇万坪）の土地を取得し、一五〇〇頭の肉牛を飼育するまでになったが、思えば、すでに五〇歳を過ぎて、敢えてこの未知の仕事に挑んだ私にとっては、ここに

入植してからの一日一日は入あしたの糧を得んがための真剣勝負であり、それは同時にあの容赦なき熱帯圏特有の大自然との根比べでもあった。

たったひとりで見知らぬ土地へ飛び、土地を求め、ブルドーザーやトラクターを使って開拓し、土地を肥やし、牧草をつくり、肉牛を買い、飼育し、管理するという一連の仕事は、やはり一種の「新たな戦い」でもあった。それは、第二の人生を過す職業にしてはいささか厳しすぎたかもしれない。しかしそれを敢えて選択したのは、あくまで私自身の意志であった。しかも私は「この仕事は何が何でもやり抜け」という命令を自分自身に課していたのである。

### 私を理解してくれた人

ブラジルでの牧場経営が当初私が目指した規模に達し、どうにか見通しが立つようになったのは入植後数年を経たからのことであった。その安堵感からか、あの強烈な憤りも次第におさまって、私は自分の後半生に思い出をめぐらす余裕すらもてるようになった。

想えば、ルパン島での私の生存が確認されて以来、私は日本の多くの人たちにどれだけお世話になったことか。捜索隊としてあのジャングルへ何度も足を運んでくれた人たち、それを熱心に支援してくれた日本国政府の関係者、そして無事帰還した私を陰に陽に激励してくれた人たち——。これらの人たちに私は何らかの形で恩返しをしなければならぬ。それはまた、同じように戦って散華していった同胞の御霊に対して、生きて還ってきた私が果すべき当然の義務である。

小さなことからいい。地味な活動でいい。自分の経験と、それから得た人生観なり、世界観なりが生かせられる

ならば、それでいい。そんなことを思索しはじめたとき、まず私の頭に浮んだのは「子供」であった。事のほか、私が子供というものを好きだったせいかもしれない。私ぐらいの年齢から何人かの子供がいて、さらに何人かの孫がいるというのが普通だろうけれども、幸か不幸か私には子供がいない。だから、たとえ二人でも三人でも子供を育てている家庭からみれば、私は子供を育てるという負担はゼロだったわけである。そうであるなら、好きな子供たちのためにそれだけのエネルギーを費やしてもいいのではないか。たとえ微力であっても、それが何らかの形で次の日本を背負う青少年たちに役立つものになれば、私の義務は果たしたことになるだろうし、恩返しにもなるのではないか。

私がブラジルで野木将典氏の訪問を初めて受けたのはちょうどそんな考えをめぐらしていたときであった。いまから四年ほど前のことである。野木さんは、私が帰還した当時から私の言動をよく理解してくださっていたらしいが、私が日本に留まらなかったということに対してたまらなく義憤を感じたという。以来、自分のロッカーに私の写真を貼りつけ、いつの日にか必ずこの人に会うんだといって、毎日私の写真にあいさつを欠かさなかったというのである。それを聞いて、私は面映ゆい気持ちを隠し切れなかったのだが、野木さんは自分の念願がかなったということもあってか、終始興奮さめやらぬ表情であった。

野木さんはまた、大学助教授の職業をもつかわら、東京の江戸川区で学生時代からボランティアで柔道場「練武館」を続けており、柔道を通してすでに四〇〇〇名近い青少年たちを自らの手で育ててきたという実績のある方だけに、いつしか私たちの話題も子供の教育問題に移り、延々と話がはずんだ。

人間にはだれにも天分というものがある。その天分を早く見抜いて、それに合った目標を子供たちに示してやれば、その目標を達成するために自分で努力するようになるだろう。ただ目標を達成するには時間がかかる。長時間の努力



今年は昭和40年である。  
 戦争が終つてもう40年たったの  
 かと感慨を新たにする人も少なく  
 ないと思う。戦時前から出発し  
 がむしやらに生きた半世紀近くを  
 アツという間だったと振り返る人  
 もいるであろう。他方、日本の戦  
 後復興の最盛期ともいふべき東京オ  
 リンピックの年に生まれた若者た  
 ちも成人式を迎え、戦争といえ  
 ばベトナム戦争のことかと聞き返す  
 世代が新しい文化を生み出しつつ  
 ある。彼らにとってはオリンピック  
 が昭和元年となるのであろう。  
 そんな「オリンピック世代」に  
 ことに願ひで欲しいこの冒頭でこ  
 の特撮「天竺の遠ざれた兵士たち」  
 を企画した。

1958年3月号抜萃



総力  
取材



こんな昭和を生きた人たちもあるのだ。菅川文蔵も山本繁一も小野田寛郎も横井庄一も平井栄三郎も、戦争という国家の命によって狂気の青春時代を祖国の外で送った。そしてタイム・トンネルに運ばれるようにして帰還する。帰ったその日がそれぞれの「終戦記念日」である。以来天皇の兵士たちはどんな人生を刻み、どんな現在を生きているのか、ZOOM IN。編集部は総力を挙げて追跡し、レポートしてみた。

(文中敬称略)

ズームイン

任務にあたつた。いわば後方かく居てある。そして、現戦に突敵、昭和20年1月のことである。サンホセ飛行場には日29日、グアドムカ、寄り着くことゝなつた。山本たちは、いわば死に場所を失くしてしまつたのだ。

（生きたがらえても任務を遂行せよ）  
 中野学校の教である。煤礦にむかうとき山本の上官は「たとえ失敗しても、山中へ逃げ込み持久戦を展開せよ、生きていけることを懸に示すことが任務である」と言い伝へる。命令どおり一年間逃げ回つて30人いた部隊は14人となつてしまふ。降伏を拒んで山中での自活の道を14人の兵士たちは選ぶ。原住民マングヤン族の生活を見よう見まねで覚え、山本たちも焼畑を始める。

天皇の太平洋戦争はついに終つていふた。  
 サクワイモを保護しても14人で食へばすくなくなるので、7人ずつ二手に分かれて暮らすようになる。別れた7人は衆議失職や選挙を受けて全員死にます。山本たちが州団の上を踏むのは、日比友野衆約が結ばれた昭和31年のことである。門司に船で入り復興と再会する。山本第一は右井仁太郎、中野重平、黒田政治の四人が皇国の戦士として帰還した。

山本は帰国の途程、教員として復職。昭和56年の選挙まで小学校の校長7年。中学校の校長も年勤め現者は相沢山田退志の隣人。『沈心全』の玉沢副院長事務長の機にある。『社長が趣味かた。サツキ、おとし、

ランなんかをいじつてます。生き物も好きでインコも飼つてます。こまこまと手を動かす手仕事が出来てゐる。学校をやめて最悪なことでは世の中一人では生きていけないということ。そして人様に驚かしてやらねえことをひたつてもやる。それが心の養生になるんだと、思います」

と漢々と現在を語る。焼畑農業でタロイモを育てた手で日曜園芸をやり、病院までの10kmの道のりをスズキ・ワゴンで通う。かつて死に場所を失くしシヤンダルをさまよつた兵士は、園遊に終極に昭和60年を走り過ぐようとしてゐる。

# ●小野田寛郎

―牧場経営

山本第一が門司港に着いた時、小野田寛郎は、まだルパンダで30年戦争を戦つてゐた。その後38年小野田は残置者として上官谷口





「笑っていてお底を見ているので背後はほとんど盗みませす、奥陣子夫人

の婦命令を受けりて、フリーデンの戦場に参りしと云ふ。  
やほり小野田は中野学校の出身で山本と同期であった。友よ見事といふた金丸ん……の陸軍中野学校後の頃、「三つ割れの旗」そのまゝの「日本の旗で有」として密林の中にいたのだ。昭和49年3月、小野田寛郎の補給は断絶的であった。外田の通信社の記者は、信じられぬと、サムライの国の冒険の兵士像を打電した。「自分」とつての味方は自然だけだった。あとはみんな敵でした。  
江戸川民センターで会った小野田寛郎はさっぱりという。ブラジルに渡ったのも帰国後のわずらしい人間関係にやがてさしたからだという。今、牧場経営もやると安んじ、こうして年一回は福留し「自然楽（楽）項野本特典」にて子供を相手に火のおこし方などを教えている時が一番楽しいという。  
「8月1日の牧草地に、今牛が1頭り頭います。身内が1人に牧草3人、トラクターとアルドラーの運転手がそれぞれ1人、建設夫が1人、毎日の仕事は半の管理です。ジャングルの開墾と機あらばミンジン・オイルにゆをいれて仕事をすボろうとする使用人とのトラブルが大変だった」  
と語る。現在住むカンボ・グラランの街はサンパウロから直線距離で3000km、ルパンタのように低島ではないが、緑の魔境マドロックスを背後にひかえた体の低島と海にふさわしい南米の湖の環境。49年3月に30年ぶりに福留して、おず

かはば月（その間4ヶ月は外国）相國の空気を吸っただけでブラジルへ帰つたのだ。温風に入つたり、まんじゅうを食べたり、しばらくは帰つてくると望望心を手放しはなかつたのかと訊くと、「自分は16年しか日本の空を食つてないんです。戦争に行く前は3年中国でしょに詰め、それから52歳まで南方でしょ」と語る。だから日本に帰るはなかつたのかと訊いても、60歳を過ぎたやうと軍人連絡が出る事になつて、食へていなくなつていなくて、まともな生活に語る。そして前住場所は違うとはいへ密林に立ち戻るのだ。牧場経営を考へるのも人間に対する不信と味方は自然だけだった、というこたけからである。牛も自然の一部という。資金は福留特典版した「わが30年戦争」が50万部売れ、さらに外国版「アー・サレングー」からの印税と残りは借金だという。  
「名前がうばつて、ヒロキというのは、心が広いということですが、性格は短気してシヤクにまわつたことがあるとすやうなことになる。それに強情なやうで、やうなといつた人達とトコトコやります。子供です。か、いません、つくりたいないんです。小野田の子供になつてくれるのいやだし、牧場も誰かがやつてくれるでしょう。けど日本の皆さんには、自分の持病のためには金を使つてもらつて、野本さんだと「自然楽」をやつて、その思返しのひとつなんです」  
話しながらも笑をたややらず、ルパンダにいた30年ブラジルに米てからの11年間も病氣ひとつしたことはありません。

江戸川でサッカーを教へる小野田の福留生活のパーティに出席

を続けるための絶対条件は健康である。体が健康でないと、どうしても持続力が失われるので、途中で挫折したり、あるいは判断自体が短絡して自暴自棄に陥ったりする。だから子供のうちに、その間にしか鍛えられない身体をまず健全にして、それぞれの天分に適した目標をもたせていくという育て方が必要なのではなからうか。

昔は小学校の先生を「訓導」と呼んだ。文字どおり「いましめて導く」ことである。やはり子供というのは、指導者自らが先頭に立ち、模範を示しながら、手をとって引っ張ってやるのが大切だと思う。同じように中学校の先生は「教諭」といった。この段階では、まだ「教える」ことだけでなく、「諭す」ことも必要だと考えたからではなからうか。大学になればもう「教授」でいい。学生も一応の自覚ができているのだから、そこでいましめたり、諭したりする必要はない。口で教えるだけでいいわけである。こうした段階的な、あるいは年齢に応じた教え方がいまの日本の教育には欠けているような気がする。私は野木さんと会ってそんな話をしたように覚えている。

### 日本の古きよき心情を

野木さんも、ご自身の教育観、人生観、またボランティアの現状や構想などについて熱っぽく話され、私も理解を深めることができたと同時に、野木さんの情熱に打たれた。

最後に、野木さんはこういわれた。

戦後四〇年も経つと、平和というものがいかにいいものであるかということさえ、わからなくなってしまうている。また日本の教育はそれを正しく教えていない。ことさら復古主義を唱えるつもりはないけれども、古きよき心情までが、ただ古いという理由だけで捨て去られていく今日の世情に、たまらない空しさを感じる。青少年の教育が問題に

なるのは当然である。教える立場の人に何の経験も自信もない人が多過ぎるからだと思う。その意味で、小野田さんのような経験をもった人の生きざまをいまの子供たちにぜひ知っておいてもらいたいし、小野田さんご自身から直接子供たちに伝えていただきたい。自分たちも小野田さんという原石を一緒になって磨き上げてみたい。だから何とか日本に帰ってそれをやってもらえないだろうか。

前述したように、私は子供が好きだし、またお世話になった日本の人たちへの恩返しの意味からも、自分の後半生の仕事として子供たちとの触れ合いを考え始めていたところであった。ただ、私はやっと経営上のメドが立つようになったばかりの牧場を捨てて日本に帰ることはできなかった。したがって野木さんのあふれんばかりの情熱に深く感銘しながらも、その時点ではっきりとした自分の意志を決めかねていたのである。しかし、たとえどんな形をとるにせよ、この仕事は自分の義務として実行しなければならないという気持ちに変わりはなかった。

その気持が次第に煮詰りかけてきたのは昨年あたりからであるが、既に出版された私の牧場経営の軌跡ともいうべき著書『我がブラジル人生』（講談社）を、それぞれお世話になった方々にお届けし、お礼とご報告を兼ねて再帰国した時、たまたま野木さんから「練武館」二〇周年記念の招待状が届いた。私は喜んでそれをお受けし、昨年の十一月、記念式典に出席した。そこで初めて「練武館」で柔道に励む子供たちと対面し、また新たな気持がわいてきたのである。すでに私の心は決っていた。野木さんをはじめボランティアに協力されておられる方々の真剣な姿勢にも接し、こうした方々の協力のもとに自分の恩返しが実現できるのかと思うと、私は手を合わせたい気持ちであった。

昭和五十九年七月七日、江戸川区が企画してくださった「小野田寛郎と語る会」からさらに発展して、江戸川区総合文化センターに一八〇〇名の人たちを集めて「小野田寛郎と共に歩む会」が正式に発足した。もちろんこの会の設

立に際しても、多くの人たちの協力を得たわけであるが、とくにこの会を運営していくにあたって、私をはじめ関係者全員に勇気を起させてくれたのは江戸川区の中里喜一区長のご理解であった。いま中里区長の力強い支援なかりせば……の思いである。

これより先、中里江戸川区長を最初に訪問したのは四月十四日のことであった。二十一年にわたり区が次々と新設する区民会館を、柔道を通じたボランティア活動の場として活用させてもらっていた野木さんが感謝の意を述べる、と、区長自身よりねぎらいの言葉があった。また、私の「より多くの青少年少女たちに接したい」という申し出に対して、中里区長は「不撓不屈の精神で頑張られた実践者であり、謙譲で多くを語らぬ小野田先生を、より多くの人たちに直接ふれていただくことによって肌から感じとってもらえば、その人たちの将来にとって影響すること大なるものと思います。私にできることがあれば、どんなお手伝いもさせていただきます」と賛同の意を表してくださった。

その後、私は百万の味方を得た心境で、牛たちの待つブラジルに帰ったのであるが、追いかけるように野木さんから国際電話があり、区長が「江戸川区に『小野田寛郎と共に歩む会』を発足するのなら、私がその会長を引き受けましょう」と申し出てくれた、との連絡があった。私には願ってもない幸いであった。

1984年1月7日 (土曜日)

# 小野田さん奮斗

## 里帰りで剣道指南



席した。同館剣道部の発  
会式も付られ、小野田さ  
んも時を付けて参加。子  
剣道五段の腕を披露。子  
供好きで、自分の体験を  
生かして教育問題など、  
も協力したいというだけ  
に、子供たちとの触れ合  
いが楽しそうだった。

二十一年間のジャングル  
生活から奇跡の生涯を果  
たし、現在ブラジルに住  
んでいる小野田寛郎さん

(六)が里帰り中に文  
室区小田向二丁目の同区  
立第五で開かれた会合  
に出席。子供たちと一緒  
に剣道の練習に汗を流し  
た写真。

四十九年三月、フィリ  
ピン・ルバン島で救出  
された小野田さんだが、  
もう十年になる。ブラジ  
ルでの牧場経営も軌道に  
乗り、夫人の町枝さん(一  
四六)と二人で里帰り。  
この日は、江戸川区内  
で武道の奨励と奉仕活動  
を続けている「練武館」  
「野木将典館長」のメン  
バーらによる激励会に出

パウリスタ新聞抜萃 1984. 1. 7

# ◎◎◎ 小野田さん、里帰り

四十九年三月、ルバン島から  
三十年ぶりに生還し、ブラジルに



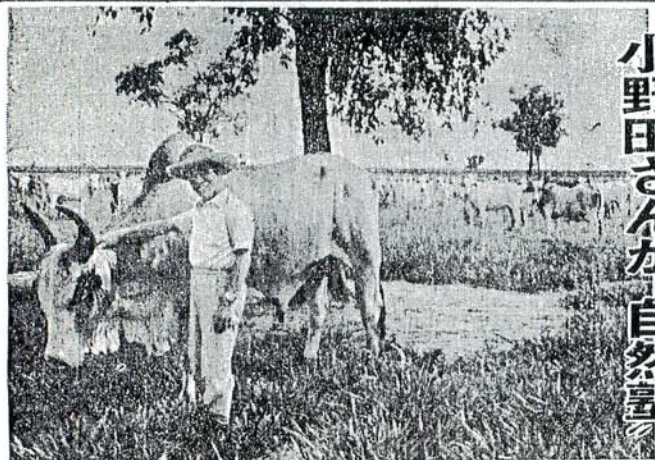
中里区長を訪れた小野田さん  
(中央) 江戸川区役所で

移住している小野田寛郎さん(左)が  
十四日、江戸川区に中里第一区  
長を訪ねた。

同区の柔道サークル「練武館」  
(野木将典館長)が昨年暮れ発足  
させた「小野田寛郎と共に歩む  
会」の賛同者として中里区長に署  
名第一号となつてもらうため。同  
会は青少年の健全育成をめざし結  
成され、この八月には山梨・忍野  
村で小野田さんの話を聞きながら  
合宿したり、年末には「不撓不屈  
大会」と銘打った柔道大会を計画  
している。小野田さんは「なかな  
か帰国できないが、野木さんのサ  
ークルで日本への感謝しのびの  
一掃になります」と話してい  
た。

59. 4. 15 サンケイ新聞抜萃













## 私の体験を役立てて 自然児教育やりたい

小野田さん、知事を訪問 語る

十年前にフィリピンのルバ  
ンク島から三十年ぶりに帰  
還、現在ブラジルで牧場を経  
営する元日本兵小野田寛郎さ  
んが、十七日県庁に細川  
知事を訪問、今後日本に定期  
的に帰国し、自然の中で強い  
子供づくりの事業を実施する  
決意を披露した。

小野田さんは「ブラジルか



細川知事と懇談する小野田寛郎さん（県庁で）

ら日本の子供を見ているとひ  
弱で意志の弱い子供が多く  
不健康な肉体が非行に走らせ  
ていることにやもたてもたま  
らなくなったという。この  
ため自然の中で合宿やキャン  
プなどを行い、ジャンクル三  
十年間の生活で養った考えや  
精神を子供たちに教えること  
を思い立った。たまたま、小  
野田さんを慕う東京都の住民  
が「小野田寛郎と共に歩む会

（野木将典事務局長、東京都  
江戸川区）を昨年十二月に設  
立、健康で力強い野性児を育  
てるために共同歩調をとるこ  
とになった。

小野田さんは「青少年の育  
成など難しいことなく単純  
に強い子供をつくりたいとい  
うことから出発した。私の三  
十年間の体験が少しでもお役  
に立てばと思っている」と控  
えめに話し、細川知事も「大  
変期待しています」と励まし  
た。熊本を訪れたのは、ブラ  
ジルで、県出身者にお世話に  
なり、特に熊本に親しみを感じ  
ているため。小野田さんは  
現在、ブラジルサンパウロの  
西で約一千鈴の牧場に千五百  
頭の肉牛を飼っている。

1984年10月3日 (水曜日)

# 日本の少年に根性を

## 小野田さん「特訓」帰伯談



小野田さん

心身ともに健全な少年の育成を—このほど訪日した小野田寛郎さんは、野木将典・国士館大学助教授が東京都江戸川区民会館で指導している柔道場に通う少年たちの父親の要望をうけて中里サッカースタジアムを誕生させチーム

ワーク、根性の育成に当たり、一応軌道に乗ったところで二十九日帰国した。一日午前、あいさつに來社した小野田さんは、「いま日本で忘れられている人間と自然の触れ合い、人間同士の結びつきの大切さ、さらに親の過保護からくる子の甘え、喪失した自立心や根性を取戻すことの必要を自覚した父親たちの要望をうけたもの。」

キャンプ生活を行い、自然の中で生きる忍耐や克己心を鍛えた。サッカーはチームワークや、苦しくても走り抜く気力を植えていくのに役立つ。歩む会、は北海道はじめ全国各地からぜひつくってほしいとの希望が殺到しているので、十一月訪日する。

七日、名古屋市でキャンプ協会有志が中心となり盛大な出版記念パーティが行われるという。

# サバイバルの知恵

## 日本の子供に伝授

### 富士山ろくでキャンプ教室

### 東京っ子少ないと追加募集

全国から300人



今度来日する小野田さんと、子供たちとキャンプに参加する小野田さん

総裁を招かず、フィリピン・ルバング島のシャングラに誘われ、四十九年帰国した小野田寛郎さん（ミッドランド在住）が、この夏休みに日本の先達として来日した。ところが、

切羽迫るという状況の中、子供たちの参加が少なく、追加募集する。

「自然塾」としてのキャンプを企画した小野田寛郎さん（ミッドランド在住）が、

野木さんらにキャンプを計画し、山梨県と長野の富士山ろくにあるキャンプ場を会場に、七月十三日から八月九日まで、三日四日を四回に分けて行うこととした。小野田さんはルバング島での三

十年間で経験した火の大切さ、「星を眺めながら自然を計算する方法」などを子供たちに教える。

が来日、野木さんと再会した際、「十年前の経験では、い

ろんな方にお世話になった。感謝のつもりで、日本の子供のために私の経験が役立つ方法はないだろうか」とも思

いたが、全国からの応募を先着順にした結果、東京以外の

められた江戸川区の中里第一地区などの企画の実行者にな

供の参加を中心に考へて

いたが、全国からの応募を先着順にした結果、東京以外の



# A woman from 'down under' trying for the highest feat

Among the brown-eyed and black-haired youngsters practicing judo at Renbukan in Edogawa-ku, Tokyo, the Australian woman is conspicuous with her blond hair and blue eyes. With a quick move, she throws her partner with a *seoinage*, back throw.

Julie Readon, 26, came to Japan with her husband and two children in April. She receives training at Renbukan under the instruction of Masanori Nogli.

Readon, who stands at 155 cm, was born in a three-girl and four-boy family. One of her brothers and her sister are judoists. When Readon was 9, she followed her brother to a *dojo*. Since then, she has become a die-hard judoist.

She was probably destined to be such. Everything she did had something to do with it. She met her husband Philip Readon at a *dojo* in Sidney when she was 14 years old. They started dating two years later and got married when she was 17. Her family objected to it on the grounds that she was too young, but the determine-minded girl decided to go for it.

A year after her marriage, their first child was born. Readon stopped practicing judo. However, she made her comeback four years ago and dominated the under 48 kg class for four straight years.

In the women's World Judo Championships held in Vienna, Austria, last November, she impressed everyone by getting a bronze medal.

"She did very well in the tournament, but she had no luck," said Julie Fritgerald, a judo teammate who came for the Pan Pacific Judo Championships held last week at Kodokan. "She lost to a girl she should have beaten. Otherwise, she would be in the finals."

A bronze medal would be more than enough for most mama-athletes, but not for Readon. She has one more dream to fulfill.

Readon's sister, Sue Williams, is a world champion and a gold medalist from the Pan Pacific Judo Championships. It is only natural that she wants to become a world champion. That is the reason that brought Readon to Japan.

Last December, Readon came to Japan with the Australian judo national team for the Fukuoka International Tournament. Nogli, who has been a volunteer judo coach for 20 years, invited the Australian team to visit his Renbukan and Edogawa-ku, which is known for its *dojo* facilities.

The Australian national team



Weekly



Weekly

coach's *dojo* and Nogli's Renbukan became sister *dojos*. When Readon made it known that she wanted to pursue training in Japan, Nogli was more than happy to have her. "In a world where men dominate, it is good to have a woman," said Nogli. "It is nice that she takes care of the kids, too."

The Readons are a judo family. Philip Readon holds No. 1 *kyu* and is expected to get a black belt before he leaves Japan. The children also joined Renbukan.

Readon leads a complete judo life. She runs every morning and goes to Kokushikan University for training on Mondays, Wednesdays and Saturdays, to Renbukan on Tuesdays, to Amano Dojo on Fridays and to Kasai Sports Center on Thursdays and Sundays.

She practices three to four hours

a day. Her partners are both males and females.

Her tournament schedule includes the British Open to be held in October, Dutch Open and Fukuoka International Championships in December. She will also be a volunteer children's coach on a trip to Saipan in August, which is organized by Nogli's volunteer group Kokusai Shizenjuku, or International School of Nature.

Although women's judo will only be an exhibition event in the Seoul Olympics to be held in 1988, Readon is looking forward to going to the Olympics. "Because even if it is an exhibition event, a medal will popularize judo in Australia as there are not that many medalists in that country," she said.

Actually, what Readon is after is more than a gold medal. She wants to learn the spirit of martial



Weekly

**HER GOAL:** What 26-year-old Julie Readon is after is more than a gold medal. She wants to learn the spirit of martial arts through judo and promote cultural exchange between Australia and Japan in the future. Left, the Readons in Japan.

arts through judo and promote cultural exchange between Australia and Japan in the future.

"I want to be a coach and run my own *dojo*," she said.

Readon's strongest techniques are *seoinage*, back throw, *latoshi*, body throw, and *ashiwaza*, foot techniques. According to Nogli, she needs one more decisive technique to have a good shot at the world title.

"I have to combine forward and backward techniques," she explained.

Like most foreigners in Japan, Readon can't fit in the 'seniority system, although she understands the idea. "I do not feel any seniority to anyone or vice versa," she added.

Philip Readon, 29, who worked for the government in Sydney took time off to help his wife fulfill her dream.

When Readon goes to practice, her husband takes care of the children and cooks for them. Asked why he would make such a sacrifice to help his wife, he replied, "If your wife wanted to be a world champion, what would you do?"

The Kokusai Shizenjuku has activities such as judo, volleyball, baseball, etc. There are several soccer teams made up of foreigners, too. For more information, call 03-585-5950.

—SEEKAY LAN  
Special to the Weekly

五輪だ!「アフリカ三四郎」

江戸川「練武館」のジョーチン



「励ます会」でけいこ仲間たちから激励されるジョ  
アキム・ニアムさん（左）。右隣は野木諒展  
＝江川区平井4丁目、平井コミュニティー会館で

け、さうぞう区  
民館の中に入つてみた。欧  
みに近い指扇着を予想して  
ニアムさんはけいこが無料  
り、びっくり。その場で被  
入りを決めた。

以来、毎週日は必ず、一  
館やスポーツセンターなど  
用する民館のけいこで汗  
している。護国館や警庁

五輪の話題を約束した。

ニテ人さんは七八、般に出場する。そしてテレビを肩文字どまの脚になるように三と柔道の腕に練武館のマークを縫いつけて出陣する。野木館長は、床のバネが強く、根柢もある。護身無理だが、かなりのスピードで、ついでに「チン」を叩きつけて。

た。

練武館との出会いは三年前の夏。当時江戸川区平井に住んでいたが、自宅近くの小松川区民館から響く練武館のけいこのかけ声を聞きつ

道場あげて お礼

勸正寺には約三十人が出  
席、野木嘉蔭、練武館三人  
の代表としてがんばってほ  
しい。きょうとむねの胸みに  
なると「われらのジョーチ  
ンを激励した。これに対し、  
ニムさんは随分よな日本旗  
で、いふなををしてもらえ  
ると思ひがかった。日本に來  
て二番の目」と述べ、ロス

ニアム人は十七歳の時、アッた。しかし、国際大会で日本  
力の柔道チャンピオンにな選中に軽く二本負けしたとこか  
四年前に米日し

ナイジェリアから来日四年

母国代表の座に

江戸川の水は、柔道に鍛えてゐるナニヤ組織「飛騨」(食料、代食料、五輪補助に用ゐる)となつた。また二、三組はいと落着いたナニヤ組織が、柔道のナニヤ代表としてロンドン五輪に出ることをなぞ。そのほか、さうさういふ間やその親戚の何処か井のヨムニ、ニヤ会館に來たり、助手会を開いた。夏は江戸東馬場四丁目、ソナキム・ニアさんなど。屋はシビユターの牧場、のた馬場等と通ひ、夜は柔道のけいこをしてゐる。

のけいこにも顔を出しているが、「練武館で子もたちと一緒にやるのが一番楽しい」とアムさん。練武館では「ジョー子」と呼ばれる人気者で、子もたちからサインを求められ

兄い  
のは、ニアムさんが初めて。それだけに、野木部長をはじめ仲間のはきは大きい。

た。純武郎との出  
合いは三日前の  
夏、当時江川  
区非に住んで  
いた。目撃証  
人の小松村民  
館が、夏、純武  
郎が、このか  
けを聞きつ

道場あげて お礼

純武郎は、約三十八人出  
陣、野木留が、約三十三人  
の代表としてがんばって  
いた。ききとちあいの助は  
なご、この「われらのジ  
ン」を勝った。これに対し  
、三ツ木さん、勝ちすぎた目撃証人館が、  
「日本を代表しててもえ  
る」と思われた。日本を  
代表して、二番目に、ロ

[illegible]

道場あげて お祝い

五輪の話題を約束した。

ニテ人さんは七八、般に出場する。そしてテレビを肩文字どまの脚になるように三と柔道の腕に練武館のマークを縫いつけて出陣する。野木館長は、床のバネが強く、根柢もある。護身無理だが、かなりのスピードで、ついでに「チン」を叩きつけて。

勸正寺には約三十人が出  
席、野木嘉蔭、練武館三人  
の代表としてがんばってほ  
しい。きょうとむねの胸みに  
なると「われらのジョーチ  
ンを激励した。これに対し、  
ニムさんは随分よな日本讀  
で、いふなををしてもらえ  
ると思ふがった。日本に来  
て二番の目」と述べ、ロス

のは、ニームさんが初めて。それだけに、野木館長をはじめ仲間同様の喜びは大きい。

牧場は、サンパロの面积约1000haにあり、  
初は5130haの牧草を切り開いて、雑作（とう  
もろこし）をつくることにし、翌年草をまいてや  
牧草畑にするという作業をくり返した。やがて  
牧場なるまでに牧草畑、草の種まきと3年はか  
かりました。今では、

の6倍の1500頭がいます。小野田さんは放牧全体の経営の態牛を連うカボイ・カネローに譲り、牛の群れに分け入り、牛や牧草の管理、監督もしているといいますが、その仕事、経営もやっと軌道にのってききました。

小野田寛郎と共に歩む会は  
子どもの教育主体の活動の会

小野田寛郎をたの  
びて終わらせたい  
ものだがね、やはり  
いた人、小野田先生  
さのしんはいない  
たからですと、小野田寛郎と共に歩む会が発足  
した。土師大治教授の推薦で、今後はこの会  
務も彼でいい。会費は東京、江戸川、長  
七、七、七に発表披露等ありました。この川は  
いんと共に青少年の教育を主体とした活動を行  
うこと、というもので、全国的な規模で広がって  
いくこと。

自然塾もこの一環としての活動として行なわれ  
て、海、風、樹、木と自然と一体であった小野田  
先生の体験をふまけてはいと表現したもので、



「ハチたーっ」

「外編」

に、三田の三田な

ハチに刺されて泣きわめく由に  
浮足たち、バニツク状態に陥っ  
てわれ先に山を下ろすとする千佳  
たち。

「確かに。あつてよかったんだ。ハナと結婚してるとかから」。

ゆっぴりと云いつた後、やにやにスミソンのベルトを握るめ、白

升さん  
英だっ  
た

[illegible]

◇95◇

自然塾

初体験の“ハチの一刺し”に悲鳴

何の不自由なく、更に写真を送つていふ最近の供状で、自分を何かをその小説家体筆致でなす供状で、その年毎の写真を山本供のその自然のなかにあつてみたらしく、それが「御田田」をよかに開きたのはそれと初めは体面なく、想入りの小説だ

の方法は都元の人たちの古くからの暮らしの知恵です。

一時間すると、今井君も村に君も、ハチに刺されたところを忘れたように飛び回っていた。

「このあたりのハチだったらい

刺されても大丈夫。二人ともいい経験をした上でしよう。それに  
 ハチに刺されると血液が凝固され  
 るんです」

小野田さんは、静かに笑ってい  
 ました。

さて、『小野田自然塾』のキャンプは、水道や電気、あらゆる娯楽で整備している遊園地のキャンプ場のそれとは大違いです。水は谷川でくみ、トイレも自分たちで穴を掘ってこくる。でかいかきり、文

圖說·文

夜、大丈夫がな 「今夜  
デントがおうちだよ」「だいじょう  
ぶかい」「うん」—山梨県・忍野村で



サンケイ自然塾



## フ回夕ロム

### <第一部>

開 会

経 過 説 明

小野田寛郎と共に歩む会

野 木 得 典

あ い さ つ

江戸川区長

中 里 喜 一

小野田寛郎先生のお話

### <第二部>

映 画 「大 湿 原」

一我が愛するパンタナルー

撮影部長 小 野 田 寛 郎

解説 矢 島 正 明

#### パンタナル(Pantanal)

南アメリカのブラジル・ボリジヤ・パラグアイの3国にまたがる大湿原である。日本の2倍の面積という広大な湿原で、雨季になると田舎の狭い無社の開田が氾濫しその全貌を現わす。野生動物の愛好のオアシスである。南アメリカ大陸最大規模の秘境である。

## 小野田寛郎先生 と 語 る 会

青少年の健全育成のために

と き 昭和59年7月7日(土)

午後2時

ところ 江戸川区総合文化センター  
大ホール



江 戸 川 区

小野田寛郎と共に歩む会

中日新聞抜萃 1984. 11. 28

中 日 新 聞

昭和59年(1984年)11月28日(水曜日)

元日本兵・小野田さんが教育本

### 約500人が出版祝う

中日 パレス

終戦後二十八年間もフィリピン・ルパン島の原生林の中にひとり、四十八年に帰還した元日本兵の小野田寛郎さん(50)が「子どもは野性だ」という題名の本を出版、その記念祝賀会が二十七日、名古屋市中区栄、中日ビル内、中日パレスで関係者約五百人が出席して開かれた。

小野田さんは現在、ブラジルの南マットグロッソ州で牧場経営をしているが、経営が

いる。

出版祝賀会には小野田さんの趣旨に賛同した桑原野根元興知事らが発起人になつて開かれ、このあと発起人らが中心となつて今年八月に設立した「小野田寛郎と共に歩む会」の中部支部造りをす。

小野田さんは「教に願して日本のみなさんに世話になりました。そのままだと無理知らずもはなはだしい。何らかの形でお礼したかった。本が少しでも役に立てば……。今後毎年一回は日本に来て、子供のキャンプ指導などを通して、みなさんに「平和」と語った。

ルバン島  
の元日本兵

# 小野田さんが若者教育



「新しい青少年運動を」と話す小野田さん(右)と野木さん

再上陸する日本軍を諷刺する  
ためルバン島に逗留。た  
った一人の戦士を連れていた  
小野田が、戦後日本に帰った  
のは四十九年だった。国  
内の騒ぎを避けて郷里にはプ  
ラシに帰る。九年間の努力  
でボリビア国境に近いマッ  
グロソ州で千八百一十八人、  
約千五百頭の牧場を経営する  
までになった。

江戸川区内では青少利用の  
運動場(緑地帯)を千九百  
七十七年、園主館大助教授、野

ルバン島から帰還した。最後の日本兵。小野田君  
さん(右)を助けて青少年運動を誘ったという。小野田  
君と共に歩む(会長)中里(江戸川区)が  
七日、発足した。小野田さんがラシに移住してから  
九年。江戸川区内の一環遊家との出会いが、小野田さん  
を動かした。「一年ならならぬ(今)不眠の精神を  
抱える。島に帰る。これだけの国に帰る。精神を  
抱える。小野田さんは若者への熱意を語っている。

江戸川で歩む会」

## 後半生、国に恩返し

### 少年キャンプや父兄懇談

江戸川区総合文化センター  
で七日、開かれた発式に  
は、同区内のP.T.A.、青少年  
団、関係者約千八百人が集  
まった。「目的と趣意がなけ  
れば不発射の精神は持続し  
ません。社会との連携の中  
で、子供たちの個性を伸ばす  
目的を育てあげるのには親の  
役割。大きな目で助さんと一  
緒に考えていきたいと思います。」

「島で一人減り、二人減  
り、たった二人になってみる  
と、世間の嫌さというものを  
改めて実感させられた。若い  
父母や子供たち、社会協力  
の大切さを訴えたい」と小野

田さん。九月下旬まで、同  
区からは夏に三か月ずつ編  
入する計画だ。

「共に歩む会」では、近く  
賛助会費も募って江戸川区内  
を中心に懇談会を開催する  
ほか、二十三日からは少年  
キャンプを開く。日本、ラ  
シの交流をめざしてサッカ  
ーチームも結成する。江戸川  
区も全面協力の予定だ。

# 東北道新聞

## 25日に小野田さん来帯

### 子供にルバング精神―講演



小野田氏が出版した「子どもは野性だ」



野木さん

を子ども達に伝えるため山梨で実践した自然塾は大きな反響を呼んだ。同氏が持つ子育ての思いがこのほど一冊の本にまとまり、その出版記念をかねた全国キャンペーンの第

「大人も子どもも、ちゃんとしすぎる。今こそ野性をとりもどさなければ……」ルバング島三十年、不撓不屈の精神

小野田寛郎氏が二十五日帯広で講演会を開き、小野田精神を帯広の子に披露することになった。帰郷後、ブシムヘ

移住した小野田氏が自然に即応した生活の中で育んだ精神

一弾が帯広で開かれる。すでに草森義経帯広柏葉高同窓会長を代表世話人とする「北海道小野田寛郎と共に歩む会」が結成の運びとなり小野田精神が帯広で大きな話題を呼びそうだ。

小野田寛郎自然塾の誕生は東京で大学の教員をとり、また武道を通して多くの青少年教育を実践してきた野木将典氏との対面からで自然塾に

小野田氏が出版した著書「子どもは野性だ」の出版記念を兼ねた講演会は二十五日午後二時から寿御苑で開かれ、そのあと出版記念パーティーを同会場で行く。

同氏は帯広から全国キャンペーンをスタートし、二十七日には名古屋での講演が決定してゐる。

59・11・10 東北道新聞抜萃



# 一家で移住 黒帯ママが柔道一直線

ご主人のフィリップさんが腕をふるった食卓で、しばし一家団集



「将来は柔道の指導者として日本に負けない技量を持ちたい」と練習一筋の毎日

町の道場で練習に励む外人サンの姿も珍しくなくなったが、ここで紹介するジュリー・リードさんご夫妻のジュウドウに賭ける意気込みはハンパじゃない。一家総出で柔道はシドニー市から東京の江戸川区へ。柔道移住してきたのである。

ジュリーさんはなかなかの実力者。身長一五二センチ、体重四二キロと日本女性並みの小柄な体格ながら、かの国では軽量級のチャンピオン。今年一月の世界選手権でも三位入賞を果たしている。しかし、ナンバリングでは満足できない。世界一になるんだとばかりに、ウチをたよって同区で野木将典さんが指導する練武館に入門。四月から、その日を目指して猛稽古に明け暮れている。

「まだ二カ月あまりですが、確実に世界をとれるでしょう」

師の野木さんはそういつて彼女の實力を保証するが、そんな女三四郎に思わぬ伏兵が現れた。東京の物産だ。何しろご主人のフィリップさん(三三)は測量技師の職を投げうって内助の功(一)を発揮しているため無収入。牧畜の本地・柔州とは肉の値段が全然違い、出てくるのはタメ息ばかり。英会話でも教える生活の足しにしたいと、ますお派遣婦は溺り果てる。

もともと、ジュリーさんが世界一にこだわるのは、女の意地。が、削れている姉のスーダンさんが一足先に世界大会で優勝しているからである。それにしても東西を問わず女性の執念のスゴさに敬服するばかりです。

撮影／竹本 務

# TOPICS

大会トピックス

## 第1回不撓不屈杯柔道大会

小野田寛郎氏の「不撓不屈の魂」を現在の青少年育成に――

9月9日(日)、東京の江戸川区スポーツセンターで、第1回不撓不屈杯柔道大会(主催・小野田寛郎氏と共に歩む会、主管・練武館、後援・江戸川区)が開催された。

この大会は、1974年にルバング島で発見され、その年30年ぶりに日本への帰国を果たし、現在はブラジルに渡って牧場を営んでいる小野田寛郎氏の「日本人精神」を今の時代に生かそうという主旨で今回初めて開催されたもの。小野田氏は、全世界の人々に実証された強靱な意志力と冷静な洞察力を育てた「不撓不屈の魂」をこれからの日本の青少年のために役立てたいと発念、その心くばりのできる身心のすこやかな青少年の育成に全力を傾注したいという熱情に賛同した東京・江戸川区の練武館道場(野木将典館長)らが中心となって今回の大会開催にいたった。

当日は小野田氏はもちろんのこと、ロス五輪の95kg超級チャンピオンの斎藤仁5段もゲストとして招かれ、小学生、中学生が個人戦に熱戦を繰り広げた。

<男子>

▶小学3年の部

優勝・小宮大輔(岡ノ谷)  
2位・吉田道成(吉田)  
3位・北條光晃(関根)  
3位・奥村宜雅(橘金)



開会式であいさつをする小野田氏(右端)。左端は斎藤5段

▶小学4年の部

優勝・川本稔典(天野)  
2位・黛孝佳(天野)  
3位・松浦剛(練武館)  
#・安本栄来(吉田)

▶小学5年の部

優勝・鈴木真吉(吉田)  
2位・山田淳司(柔成)  
3位・小宮敏昭(岡ノ谷)  
#・須永徳義(岡ノ谷)

▶小学6年の部

優勝・川本義政(天野)  
2位・関根伸一郎(関根)  
3位・小野栄志(関根)  
#・高橋彰(吉田)

▶中学1年の部

優勝・増田力信(吉田)  
2位・野口晃男(森田)  
3位・鈴木純二(天野)  
3位・井原邦尚(関根)

▶中学2年の部

優勝・森光秀(吉田)  
2位・鈴木大三(吉田)  
3位・押元公男(森田)  
#・中山良一(研誠)

▶中学3年の部

優勝・牧元秀幸(関根)  
2位・横合孝之(練武館)  
3位・矢作秋夫(天野)  
#・後藤精一郎(練武館)

<女子>

▶中学1年以下の部

優勝・須永由貴子(岡ノ谷)  
2位・安田政恵(練武館)

▶中学2年以上の部

優勝・二宮義枝(愛国)  
2位・遠藤広子(愛国)  
3位・相原里美(練武館)  
#・浅野早苗(練武館)

(東京都文京区・長谷川博)



## 六 干渉と無視に揺れる心・子どもの事例

T男は、都内下町の中学一年生で家庭と学校の問題児である。母親が飲食店を営み、経済的に不自由のない環境であるが、例にもれず周辺の突っぱりグループの予備軍になって、母親の手に余っている。

第一回の山間自然塾に、行政区報を見た母親が勝手に参加を申込んだらしく当日は、定刻になっても現われず、いざ出発という時に言い争いながら母親に押されるようにやって来た。漸く団体バスに乗せてスタートしたが、ふてくされて自己紹介どころか途中で降りて仲間のところへいくと頑強に云い張っている。指導員の説得にも肯づかなかったT男が、無理やりと云った形で目的地に同行させられて、いきなり組織編成で班のリーダーにさせられてしまった。

小学生から自分と同じ中学一年まで総員十二名のリーダーになったT男は、はじめのうちこそ不承不承緩慢な動作でチーム活動に参加していたが、夜になって低学年を方便につれていく、わづらわしい世話を、むしろ他のどの班のリーダーたちよりも積極的に行っていた。他人のことなど知るものか、と云ったはじめの頃のT男の表情が生き生きとして、「足元に気をつける、転ろぶなよ」と云いつつ、小さな子どもの手をしっかり握りしめて介助している。ゲームや訓練でも、自分は常に周りに気を配り最後まで見届けて自分の順番を待つ、四日間とう／＼T男はチームに関係なく低学年の子どもたちに頼りきられて、体力の限りをつくしていた。

終了日の帰りのドライヴインで母親への土産を買っているT男が一寸テレた微笑で私を見た。

わづか数日間で、連続してきた性向、習癖が修正されるとは保証できないが、T男に見る気育の実証は、確信に足るものである。

K子は、都内住宅地区の小学四年生。物心ついて今日まで親と離れて宿泊した経験を持たない。

第一回自然塾の第二グループに参加したK子は、バスを見送る母親に元気に手を振っていた。キャンプ地での行動も普通と変わらなかったが、夕食後それ／＼のテントで就寝の準備を始めた途端、火がついたように号泣しはじめた。虫にさ／＼れたか、怪我でもしたのか囲りのみんなが心配して、話しかけるが、唯泣きじゃくるだけである。抱きかかえて、焚火のところへ座らせ、しばらく放って眺めていると、一瞬泣きやんだK子は、泣き声にくらべると聞きとれないような小声で、お母さんと呟くと、再び声を限りに泣き続ける。所詮は、子どもで、夜半過ぎには泣きつかれて腕の中で寝入ってしまった。指導者のテントで朝を迎えたK子は、目ざめた瞬間の自分の状態に、どう合点したのか、泣き寝入ったことなど忘れたように、腫れぼったい眸で周囲を見回わしていた。その日から終了日までの数日間K子は、仲間と寝食を共にし、訓練に慣れ充分の疲労と感動を身につけたが、二度と泣き出すことはなかった。

第一夜の、テントで、夜具を出し始めたとき、突如K子を襲った哀しみは、長すぎた母親の添寝からの脱出の合図であった。

最後にN夫は、都内でも著名な私立中学一年生で、二人兄妹だった。第一回自然塾の最終グループに参加したN夫は、出発のバスの中から、文庫本に目を落して窓外の景色など気にもとめていなかった。

キャンプ地に着いてチーム活動が始まって、動作が緩慢なせいか、グループ活動からいつも離れている。雑木から薪を作っている仲間、枝から吊した飯ごうを運んでいる二人組、テントの周囲に雨水除けを掘っている連中、そん



な中でN夫だけが孤立して佇んでいる。夕食の用意が整いはじめた頃、N夫が蒼白な顔を更に硬くした思つめた表情で近づいて来た。私の前に来ると「僕は今から帰りますので、交通手段を教えて下さい」と必死に一言一言に区切りをつけて云った。頑くかな表情を見つめながら、食事が済んだ後で話合おうと説得をする。

夕食の片付けが終つて、星座観測の準備をしている指導員がN夫を呼んで何か指示していた。

全員が、平たんな草地に集合して安座すると、先程の指導員とN夫が正面に立上つて、星座観測の予備知識を説明し始めた。残照の茜空を指さすN夫の顔が崩れた。豊かな知識を披瀝する彼の表情に全員が感じ入って、微妙に暗転して、星座を浮き上がらせる空を交互に見やっていた。

昼間自分の存在を無視されたことへの絶望感が、一気に自信を取戻すチャンスを得て、N夫は蘇った。成長期の子どもたちの純粋な感性和挫折感を認識する環境の整備が重要であることの事例であつた。

## 七 根本は気育―欠落している環境―

このようにして、具体的な実践活動の中から、昭和六十年は、五百人近い子どもたちの非常時体験キャンプ、さらには、敗戦後四十年たつて初めて「玉碎の島・サイパン」に百名の少年・少女を原住家庭にホームステイさせるなど実践倫理活動を続けている。

例えば、SOS非常時体験一日キャンプを実施して、五百人の子どもを即時集合、深夜の緊急呼集などの突発行動に参加させると、ひとりひとりの子どもの生活環境が実によく観察できたが、ほとんどの子どもに気育が欠けていることが認められた。



曾って、子ども達は、イザと云う時に備えて枕元に、下着を上に着衣の順序に従って衣服を置いて寝た。また年長者は年下と老人を護って避難することを体得していた。静肅が集團の正しい行動を支える基本であることを知らされて、不平や不安に耐える氣力を養った。それは何も前大戦や、その前の大震災でにわかに身についたことではなく、「氣育」という極めて自然な形で民族の中に継承されてきたものであった。

しかし、現在の子ども達を取り囲む環境には、家族にも学校にも避難道具と場所は、大袈裟な程用意されていて肝心な「氣育」が施されていないために、体験キャンプでも指導員の指示の前に右往左往するか、頑是なくテントの中で泣き叫び続ける、或いはかなり重症の慢性喘息疾患児が「お遊びキャンプ」のように放り込まれて携行薬もないまゝに救急処置で命びろいするなど、実際に非常時に遭遇する場面を想像すると寒心に耐えないケースに溢れた。

また、サイパンでは現地のチャモロ系やカロリン系の原住家庭約五十世帯に二名づつ子ども達を預けた。どの家庭も年相応の子どもがいてることを前提にしたが、引受家庭のほとんどに同居している老人や、近隣の老人たちが「日本人の子どもが泊っている」ことに興味をもって、実にすっかりした日本語で話しかけられたことに多くの参加団員の子ども達は一番驚いたようであった。島が同文同化時代であった頃の思い出を、懐かしく思い出して自分の孫と日本の子どもにも日本現地両国語で交互に話しかける老婆の姿が脳裡に灼きついている。お辞儀の仕方から、はにかんだ微笑みまでその動作は日本人そのものであった。今でも神社趾を通るときには直立して拝礼を欠かさない老人が多いと聞いて、わづか十七年の共同時代が生みつけた、慣習の底にある「氣育」の真隨に触れた思いがした。

サイパン。キャンプに参加した子ども達の作文には、「ひどくきいたないまづしい家だと思ったけれども、すごく明るい人たちなのでとても楽しかった。お家の人みんなが、とてもやさしく何でもいっしょにやっているので家族って



もし  
さい  
災

SOS非常時体験キャンプ

小野田セメント

東京・江戸川区のお友だち四百二十人

修了証 次の日、午前  
9時20分、修了  
式(しゅうりょうしき)。  
小野田さんで修了証(しゅうりょうし)で

うを事わたされたみんなは、ほっとしたようす。

第三篇 第四(五)小節

みどりさんは、「災害が起ったらどんな感じとい

このなまをなまにたじろ  
小島田村とせ「上野の

訓讀(べんぽう)を基礎(きそ)

いせつなんです。頭だけで

[illegible]

1. Introduction

八七

午後3時15分 開村式 「小野田喜一郎の  
おのだ・ひろゆきと共（ごも）に遊ぶ」の

練  
会場でもある中里第一（なかのちのち）  
・新（しん）江戸川区長が、「この

川訓(くん)という時のための訓練(くんれん)です。気をつけず、最後(さいご)三

ひな  
**避葵**  
（さひ） 新築の建物のへりから  
ふくまぬ。

で  
このあま川渡防備しよう  
まうしよん人こまよりけひの

**の中**  
の  
中での遊離（ひなご）の仕方、

「ちゅうの中とは、なるべく

けむ (しせい)を無(ひ)くく  
壁(かべ)づたにエエがのが

ツ。その時、口や鼻を、手や布

١١٠٣ (د.ه. ١٢٥٠ - ١٢٥١)

いゝなあとと思った」と云う小学六年女子団員の一章が集約されている。自分の生活が機械的に規則的に組み込まれてしまった今の日本の子ども達に、親兄弟との同一行動を通して家族の形を見せることも、まして「気育」を受け取るチャンスもない、ことへの子ども達からの無心な叫びでもあろうか。

別れの日に、言葉をこえて親しみ合った子ども同士が肩を抱き合って兄弟、姉妹のように別離に涙しているのを見ながら、未来へ子ども達の豊かな成長と交流が広がっていくための教育の役割りを考えていた。

## 八 実践活動への理解と認識

昭和五十九年二月、小野田寛郎氏を子どもへの照射体に積み重ねた活動の公開場として、氏の生還当時政府官房長官であった二階堂進代議士の肝入りで、「教育を語る集い」と称した約千名近い各界代表者による会合を開いた。

丁度この頃、小野田寛郎氏が私の実践教育に参加されて幾つかの子ども達との行事の中で得られた体験と期待を、「子どもは野性だ」と云う書物にまとめられた折でもあり、出版記念をかねた会合であった。

文教関係者を中心に、教育現場への提言と云うより寧ろ、家庭を基点とする社会環境への関心が強い講演の方が多かった。

いじめ問題に突出する教室事件だけを捉える社会面記事的な論議ではなく、実践倫理への深い理解と、実績を多くの方々から評価され実地活動の前進に大きなハズミとなったこの会合の意義を認識して、更に努力を続けていきたい。

其後の実践記録を改めて後稿に残したい。

謹啓 新春を壽ぎご貴台様の益々のご清栄をお慶び申し上げます。

扱て、過ぐる昭和四十九年日比両国為政者と国民の篤志を得て、「見事な日本人精神の具現者」として世界中の感嘆と称讃を浴びてルバンク島より帰還された小野田寛郎君は、其後祖国への報恩を胸にブラジルで牧畜事業に専念してこられました。

そして、漸く昨年七月念願の少年教育の第一步を、自己を教材に「今日の心身共に脆弱に陥入り易い環境にある子供たち」を健全な子供に育てる実験台として、山梨県忍野村と伊豆大島において「自然塾」を主宰され、事実上の教育活動に向つて出発されました。

さらにこのたび小野田寛郎君ご自身の体験と信念を著わされた著書「子どもは野性だ」が出版され、二十一世紀へ育つ子どもたちの教育に幾多の指針を示されております。

つきましては、小野田寛郎君が貴重な人生を少年教育に捧げようとされる崇高な理念を広く社会にご理解願うと共に彼の著書出版を記念して「教育を語る集い」を左記のとおり開催致したく何卒趣意ご高承賜わり御臨席下さいますようご案内申し上げます。

敬 具

昭和六十年正月

発起人代表

自由民主党  
副総裁

二階堂 進





# 野性を取り戻せ！ 日本軍最後の兵士 少年教育行脚に

「子供は、今も昔も変わりませんね。家庭さえきちっとしていれば、日本の子供達もまだまだ、上であつたものじゃないですか。このころは、ルパンダ島から帰還し、ブラジルで牧場経営を始めて約十年になる。元少尉・小野田寛郎さん(左)、小野田寛一郎さん(右)。教育評論家になってしまったようだ。東京江戸川区を拠点とした「自然塾」塾長として、子供教育に、講演活動にと東奔西走。昨年10月末に来日して以来、ブラジルの自分の牧場(知る暇もないという)で2月9日帰国予定。昨年7月、「小野田寛



ブラジルの「小野田牧場」で鍛えた乗馬を教える(上)と少年教育に深い関心を寄せる笹川会長と小野田さん



(教育を語る集いで)

【東京文芸】昨年(1984)「一本の子供たちの教育に目」を向け「自然塾」やサッポロの「子供」をテーマにした教育行脚に、小野田寛郎氏(左)と、共に歩む(中)里見昌一・江戸川辰夫、事務局(右)三浦三郎氏。この集いは、小野田氏の後援会「小野田寛郎と共に歩む会」が中心に、自民党の二階堂進則総裁を後援代表として企画されたもので、会場には、自民党元文相・渡辺美津雄氏、元財務省長代理をはじめ政財界、教育関係者約二千人が集まり、小野田氏と懇談した。また、同会では小野田氏の著書出版を記念した出版記念会も兼ね、参加者には「子どもは野性だ」(小野田寛郎著、八百五十円)が贈呈された。

が満足、自然塾、サッカークラブなど、小野田さんには、今も昔も変わりませんね。家庭さえきちっとしていれば、日本の子供達もまだまだ、上であつたものじゃないですか。このころは、ルパンダ島から帰還し、ブラジルで牧場経営を始めて約十年になる。元少尉・小野田寛郎さん(左)、小野田寛一郎さん(右)。教育評論家になってしまったようだ。東京江戸川区を拠点とした「自然塾」塾長として、子供教育に、講演活動にと東奔西走。昨年10月末に来日して以来、ブラジルの自分の牧場(知る暇もないという)で2月9日帰国予定。昨年7月、「小野田寛

## 再び「教育を語る集い」

### 二階堂氏が発起人代表

## 再び「小野田フィーバー」

わってきた。小野田さんは今のシンボリック存在だ。もう一回開いた自然塾では、乗馬火のおこし方、牧場経営から、集団行動の心得、星を見て現在地を知る方など、わかり易く少年達に教えた。「な